

Title	現代人類学理論における「分類」の諸問題
Sub Title	Problems concerning classification in contemporary anthropological theory
Author	白川, 琢磨(Shirakawa, Takuma)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1981
Jtitle	哲學 No.73 (1981. 12) ,p.179- 203
JaLC DOI	
Abstract	In recent years, there has been a growing interest in Classification among various scholars connected with cultural and social anthropology. It can be said that Classification is a key concept as an explanatory principle and a methodological device for understanding other cultures. On the other hand, however, there is considerable discrepancy in the usage of that concept, resulting in disagreement and controversy between different schools. Ethnoscience (in U.S.A) and Symbolic Classification (in Europe), discussed in this paper, are two main schools that have had no contact with each another so far. Ethnoscience, including Ethnosemantics, New Ethnography and Cognitive Anthropology, etc., has concentrated on practical, everyday classification, and developed a formal analysis which was rigid and detailed. On the other hand, Symbolic Classification has, as its name suggests, emphasis on symbolic aspects of classification, and produced many penetrating analyses that were based on "thick description" (after C. Geertz). But, paradoxically speaking, it can be pointed out that "those that have been sociologically sophisticated have often been technically and empirically weak, and those that have been technically and linguistically rigorous have frequently been sociologically naive", as R. Ellen wrote. Certainly, each field has many unique problems, but some problems should be dealt with in common. The purpose of this paper is to examine some existing problems in each field, in the hope of working towards a general theory of Classification.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000073-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代人類学理論における 「分類」の諸問題

—白 川 琢 磨*

Problems concerning Classification in Contemporary Anthropological Theory

Takuma Shirakawa

In recent years, there has been a growing interest in Classification among various scholars connected with cultural and social anthropology. It can be said that Classification is a key concept as an explanatory principle and a methodological device for understanding other cultures. On the other hand, however, there is considerable discrepancy in the usage of that concept, resulting in disagreement and controversy between different schools. Ethnoscience (in U. S. A) and Symbolic Classification (in Europe), discussed in this paper, are two main schools that have had no contact with each another so far. Ethnoscience, including Ethnosemantics, New Ethnography and Cognitive Anthropology, etc., has concentrated on practical, everyday classification, and developed a formal analysis which was rigid and detailed. On the other hand, Symbolic Classification has, as its name suggests, emphasis on symbolic aspects of classification, and produced many penetrating analyses that were based on "thick description" (after C. Geertz). But, paradoxically speaking, it can be pointed out that "those that have been sociologically sophisticated have often been technically and empirically weak, and those that have been technically and linguistically rigorous have frequently been sociologically naive", as R. Ellen wrote. Certainly, each field has many unique problems, but some problems should be dealt with in common. The purpose of this paper is to examine some existing problems in each field, in the hope of working towards a general theory of Classification.

* 慶応義塾大学大学院社会学研究科博士課程

目 次

- I. 序：混沌から分類へ
- II. 日常的分類とその問題
 - (1) 言語と認知
 - (2) アプローチにおける emic と etic
 - (3) 構造的リアリティと心理的リアリティ
- III. 象徴的分類とその問題
 - (1) 日常的分類と象徴的分類
 - (2) アノマリーとその属性
- IV. 結

「分類はいかなるものでも渾沌にまざる。」

レヴィ＝ストロース『野生の思考』

I. 序：混沌から分類へ

文化人類学・社会人類学を問わず、現代の人類学は、その対象領域は細分化され多様化されつつ少なくとも理論的次元ではある共通した軸を支点に大きく転換しつつある複雑な様相を呈している。これが果して真の転換となり得るかどうかは将来の判断を待たねばならない。がいわゆる「新人類学 New Anthropology」という呼称にみられるように、その背後で従来の人類学的視座に対する全体的変更を暗示しているように思われる。⁽¹⁾ 例えば、E. Leach が自らを合理論者 rationalist (=構造論者) に同定しつつ、「客観的事実に対してより、観念に関心を寄せるが故に、合理論者は何が行なわれたかということより何が言われたかに、より大きな関心を示すのである。……合理論者は、社会的現実というものは、実際に起こった事よりも言語で言われた事の中に、‘存在している’⁽²⁾と考える傾向がある。」と述べ、C. Frake が、W. Goodenough の論文を授用しつつ、「……文化とは“物、人々、行動もしくは感情から成り立っているのではなく”

(Goodenough, 1956), 人々の心の中におけるそれらの事象の形態や組織なのである。」と述べる⁽³⁾とき、我々は各々の学史的文脈の相違を考慮した上でも、その視座の共通性に注目せざるを得ない。即ち、第1に関心の重点の、目に見える (visible) 行動から観念や思考の領域への移行である。第2に対象への接近における客観的準拠枠組から主観的準拠枠組への移行、即ち文化の内側からの理解の重視であり、第3にその際の研究戦略の手段としての言語の重要性が挙げられる。

しかしながらこのような「新人類学」の立場が、従来的人类学史とは隔絶した地点から出発しているとみるのは誤まりである。例えば未開人の思考様式、観念体系、その心性といった問題は、著名な Lévy-Bruhl の『未開社会の思惟』を挙げるまでもなく古くから人類学のテーマのひとつであった。だがその当時の研究には、E. Gellner が「未開心性理論」及び「道德と知性の発達に関する（進化主義者の）ヤコブの梯子理論」と称したように、思考形態の差異を専らその社会の後進性から説明したことも事実である。⁽⁴⁾ それに対して、現代人類学の見方は、以下の Lévi-Strauss の立場に代表されるかもしれない。

「未開人（もしくは世にそう呼ばれている人々）の世界は主としてメッセージでできている、という考え方は新しいものではない。ただ近年に至るまで、誤まって未開人の世界と我々の世界との間の弁別性と考えられたものに否定的評価を下してきた。あたかも差異が未開人の精神・技術的劣等性の説明を含むものであるかの如くに。ところが実際には、その差異はむしろ彼らを現代の情報検索理論の専門家と同一平面に置くものである。意味の世界が絶対的対象としての性格をことごとく備えたものであることが物理科学によって明らかにされたが、それによって初めて、未開人が自分達の世界を概念化する方法が斉合性を備えているということ……が認められるに至ったのである。」⁽⁵⁾

ここにおいて異文化の概念空間は大きくその位置を換える。それは我々

の文化に対して通時的関係ではなく、共時的関係において捉えられなければならない、しかも等価値な位置を占めているのである。未開人のもつ分類形態は、我々の科学と同等の権利において「具体の科学」(Lévi-Strauss)として人類学的地平に姿を現わすのである。

次に、文化の内側からの理解という点も従来の人類学史にその根を有している。本来、B. Malinowski によって提唱された現地調査の目標は、「……原住民の視点 (the native's point of view)、彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解する……」(傍点イタリック)⁽⁶⁾という点にあったし、同主旨のことは他の人類学者達も述べている。問題は「原住民の視点」の理解のしかた、そして従来の人類学が拠って立つ方法論的パラダイムにあるのである。⁽⁷⁾ E. Leach が、Radcliffe-Brown の自然科学的モデルを通じての「実体としての社会構造」の理解を批判するのもその点に関わっている。⁽⁸⁾ 社会的行為はそれ自体としてではなく、コミュニケーション行為として捉え直されなくてはならないのである。米国では旧人類学に対する批判は、行動主義 (behaviorism) への懐疑に根ざしている。特に行動主義の産物である集団パーソナリティ概念の有効性への疑問視は、文化とパーソナリティ研究の問題点 (例えば、分析上のトートロジーや説明における循環論) の指摘を通じて、認知 cognition 研究への移行、または認知論的角度からの概念再整理を促したのである。⁽⁹⁾ 即ち、集団の観察可能な行動から推定されるパーソナリティではなく、「人間が、自らを環境としての世界にどう関わらせるか」ということが探求さるべき問題となるのである。

コミュニケーション及び認知論的角度から異文化理解への接近が可能になるのは、第3の共通特性である言語、分類及びその範疇 (category) を通じてである。その背後に理論構成における言語学及び言語学的モデルへの接近があることは言うまでもない。⁽¹⁰⁾ 少なくとも、自然とはある意味で混沌 (chaos) であり、それに対置する人類を人類たらしめているものが文化

(cosmos) である、という理念型が共有される限り、自然と文化とを媒介する人間の「分類 classification」という行為の重要性、またそれを可能にする言語と範疇への注目は自ずから了解されるであろう。その点において、E. Leach は、Lévi-Strauss の命題を「……自然をどのように把えるかに注目することにより、また我々が用いる分類の方式と分類した範疇を我々が操作する方法とを観察することにより、我々は思考の過程について根本的な事実を示唆することができるということ⁽¹¹⁾」と要約しているが、むしろ分類研究全体に敷衍できる命題である。

さて、以上の段階では我々は敢えて近年勃興してきた分類を中心的テーマとする諸研究を、一括して同一平面上で論じてきた。だがそこには、現在の段階では間接的影響を互いに与えつつもまだ明確な相互交流をもつに到らない 2, 3 の学派が含まれており、それらを区別し、その研究内容の相異を認識することが必要である。大貫恵美子は分析対象の抽象化のレベルの差異を基準に、図 1 にみられるように 3 つのアプローチに分類している⁽¹²⁾。

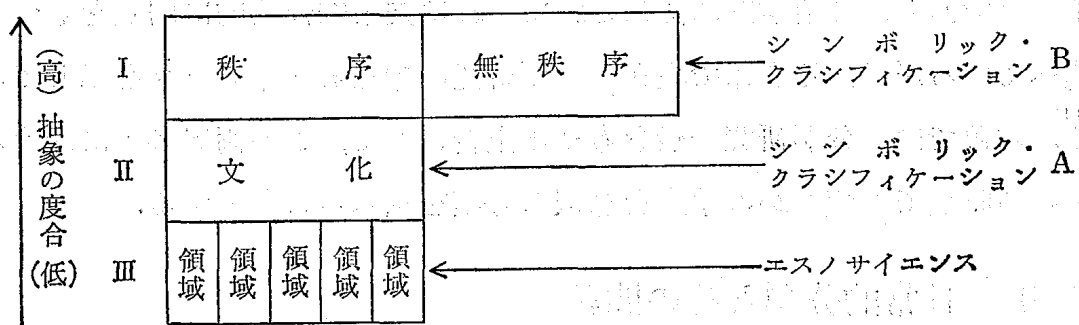


図 1 文化と分類—抽象の 3 段階 (大貫, 1980)

最も抽象化の度合の低いのは、III、即ち米国を中心に展開してきたエスノサイエンスのレベルであり、親族・動物・植物・病気 etc. といった日常生活の様々な分野における名称の分析を通じてその分類原理を発見するものである。このタイプのものには、「民族意味論 ethnosemantics」, 「新民族誌 new ethnography」, 「認知人類学 cognitive anthropology」など

様々な名称が付されているが、方法論的にはほぼ共通しており、主にタクソノミーやパラダイムなどの分析形式を用いて、日常生活の様々な意味領域 (semantic domain) の構成原理及び内容を探求するものである。次に、欧州系の「象徴的分類 symbolic classification」について、大貫は大きく2つに分けて考察している。Ⅱのレベルは、R. Needham に代表されるように、言語構造からは把握できないような文化一般の秩序の問題、もしくはある文化における「隠された範疇」を探求する方向である。Ⅱのレベルが基本的には文化一般もしくはある文化の分類原理の発見をその目標とするのに対し、Ⅲのレベルでは、「分類原理自体より、分類されている領域とされていない領域、即ち文化と自然、秩序と混沌の問題⁽¹³⁾」に焦点が合わされる。Lévi-Strauss, M. Douglas, V. Turner らのドミナント・シンボルの解釈がその例として挙げられている。このような差異は、特にエスノサイエンスと象徴的分類の関係において最も顕著である。R. Ellen は前者を「形式論者 formalists」、後者を「社会学者 sociologists」と称し、その対照性について、技術的言語学的に厳密であれば、しばしば社会学的にナイーブであり、社会学的に洗練されていれば技術的経験的に弱点をもつと述べているが、ある意味で現在の分類研究の抱えるディレンマを示している⁽¹⁴⁾。本稿では、分類研究一般を考える土台として、この両者各々における現在の時点での幾つかの争点を選択し考察を試みることにする。

Ⅱ. 日常的分類とその問題

(1) 言語と認知

D. Hunter と P. Whitten によれば、認知 (cognition) とは、「様々な方法で知るということをすべて包含する」用語であり、「一般的な使用では、知覚・判断・推論・記憶・思考及びイメージがそこに含まれる」という⁽¹⁵⁾。言語と認知の関係を示唆する命題は、一般に「Sapir-Whorf の仮説」、あるいは主張の類似性をさらに拡大して「Humbolt-Boas-Cassirer-

Sapir-Whorf-Lee の仮説」⁽¹⁶⁾として知られている。その内容は、言語相対性理論と呼ばれるように、簡単に言えば、民族の有する言語の型の違いが、彼らの思考（認知）の型の違いを生じせしめている、という民族の思考型の相違の原因を言語型の相違に求める考え方である。⁽¹⁷⁾「認知人類学」(S. Tyler) 及び「エスノサイエンス」(W. Sturtevant) の関心がその点にあることは明白である。S. Tyler は、認知人類学の関心は人々の心的コードにあり、それは「言語に描かれているコード」を発見することを通じて行なわれると述べ、⁽¹⁸⁾W. Sturtevant もエスノサイエンスを「ある文化における典型的な知識及び認知の体系」の研究と位置づけ、研究の出発点を現地の用語法に置いている。⁽¹⁹⁾だが問題はある文化の言語の意味論的分析結果を認知体系と同定してよいかどうかにある。その点で「Sapir-Whorf の仮説」は現在の時点においては未だ検証されていない仮説に過ぎない。有馬道子は、言語学におけるその後の展開を顧みてこの仮説の解釈を強い解釈と弱い解釈に分けることを提案している。⁽²⁰⁾即ち、強い解釈とは「言語は認知と思考の過程を決定する」ということであり、弱い解釈とは「言語は認知と思考の過程に影響を及ぼす」ということである。その点からみればその後の言語学上の展開は、賛否何れにしろ圧倒的に弱い解釈をめぐる進行してきた。H. Hoijer はこのテーマに関して「……言語の型は不可避免的に感覚的知覚及び思考を制限するのではなく、他の文化型とともに知覚や思考をある習慣的なチャンネルに方向づけるに過ぎない」⁽²¹⁾と指摘しているが、弱い解釈は最低限受け入れられるものの、強い解釈を支持する何の根拠もないというのが、言語学上の趨勢のようである。

その点から判断すれば人類学においても言語の意味体系＝認知体系という安易な前提は控えねばならない。R. Burling はその点に関してかなり否定的である。彼はエスノサイエンスの方法論的批判を論じた上で、ある言語体系の意味分析というレベルで満足すべきであり、認識の構造というような非現実的目標を追うのはやめるべきだと主張している。⁽²²⁾第2の立場

は C. Frake に代表されるように、その関係に慎重ではあるべきだが、むしろ「Sapir-Whorf の仮説」の弱い解釈に沿う見解をとる。⁽²²⁾ その際の論拠となるのは 'codability' (R. Brown & E. Lenneberg) の概念である。⁽²³⁾ ある文化の用語体系の分析が成員の認知世界を十分に明らかにするとは言えないが、「最も頻繁な伝達を要する認識的特徴は、標準的で比較的短い言語標識をもつ傾向がある」ことを基に名称分析が認知研究の有効な出発点になるというのである。

以上に述べたように、言語と認知の関係には経験的に立証されていない不確定性がつきまといっているのが現状である。だがエスノサイエンティストの多くはその関係に慎重ではあるものの、とにかく「ある言語を話す人々が周囲の世界の諸現象をいかに分類するかが発見できれば、それは彼らがいかに世界を知覚しているかを理解する助けになるはずだ、という前提⁽²⁴⁾」に従って研究を進めている。そしてその前提に対しても同様に根強い批判が存在していることにも留意しなければならないのである。⁽²⁵⁾

(2) アプローチにおける emic と etic

前述したようにエスノサイエンスの研究目標のひとつには、主観的準拠枠組による文化理解、即ち文化の内側からの理解を目指す方向が見出される。「主観的文化 subjective culture」(H. C. Triandis)「認知的文化 cognitive culture」(R. Brown) という概念からも推察されるように、このことは必然的に文化概念の変更を含んでくる。それがかつて B. Malinowski が目標とした「原住民の視点」の理解に沿うものではあっても、行動体系ではなく成員の認知活動(分類)から理解しようとする点で特色をもっている。S. Tyler は「……文化とは実体的現象(material phenomena)そのものではなく、実体的現象の認知的組織化である⁽²⁶⁾」と述べているが、分類体系を知ることによってネイティブリアリティの構成原理を理解しようというのが、エスノサイエンスに共通の姿勢であるといえる。そしてその姿勢の基底には、文化は各々独自の認知体系を有しており、その記述が

完成しない限り、安易な項目抽出は控えねばならないという考え方が潜んでいる。だが一方その考え方を推し進めると極端な文化相対主義に陥り、比較という作業を断念せざるを得なくなる。現在、emic-etic 問題といわれるものは、簡単に言えば、そのディレンマを示している。

emic 及び etic という用語は、言語学における phonemics (音韻論) 及び phonetics (音声学) からの転用であり、言語学者 K. L. Pike によって一般的な人間行動に対するアプローチにその適用を拡大されたものである。⁽²⁷⁾簡単に言えば、ある未知の言語体系を研究する場合の、そこにおける意味の相違を知らせる音声の範疇 (音素 phoneme) の識別という側面と、そこからさらに普遍的レベルにおける音声学的な一般化という側面を、文化体系に置き換えた場合、D. French が言うように、ある文化的事象に対して、それを「それ自身の構造から記述しようとする」emic と「他の諸文化や外面的な単位セットのような、外面的尺度から捉えようとする」etic の2つのアプローチが可能なのである。⁽²⁸⁾この対照性を、J. Berry と P. Dasen に従って要約したのが、下記の表である。⁽²⁹⁾

Emic アプローチ	Etic アプローチ
システム内から行動を研究する	システムの外の位置から行動を研究する
ひとつの文化だけを研究する	多くの文化を研究しそれらを比較する
分析者によって発見される構造	分析者によって考案される構造
基準は内面的特性に対して相対的である	基準は絶対的もしくは普適的とみなされる

エスノサイエンスの志向が emic アプローチにあることは明白である。文化の内側からの理解の重視とは、emic アプローチの強調に他ならない。この強調の背後には、例えば J. P. Murdock らによる HRAF (Human Relations Area File) の試みや、あるいは Radcliffe-Brown 流の比較社

会学にみられる問題点に対する深刻な反省が潜んでいる。比較に耐え得る範疇には真の意味での等価性 (equivalence) が必要なのである。⁽³⁰⁾「比較文化的対照は、形式的同等よりも意味上の同等を必要とする。」(J. Whiting) 即ち、「emic に裏付けられた etic」をもって初めて比較というレベルに到達できるのである。

だが一方で、未知の文化に対して最初の段階で果して純然たる emic な記述が可能であろうか。その点からみれば、emic な記述を志向はしていても、その記述にはやはり何らかの etic な概念装置が前提とされているとみななければならない。D. French はそれについて「新しい問題に対する最初のアプローチは etic でなければならない。何故ならまず親しい範疇から、研究される体系の範疇へと移行しなければならないからである。」⁽³¹⁾と述べているが、ここで我々は「emic の前提としての etic」という問題に直面することになる。J. Berry はこれを「賦課される (imposed) etic」と呼んで比較研究の出発点に位置づけているが、対象に対する研究者の価値混入を避けるという意味で、また形式的同一性による単純な比較を避けるという意味でもその点の認識は重要である。

現在の時点では、方法論的手順としては (1) etic (2) emic (3) etic が大方の研究者の一致するところである。だが、記述・分析・比較といった具体的な方法論的局面では、一致というには程遠い状況にある。大ざっぱに言えば、比較による一般化に関心をもつ比較文化心理学では「emic に裏付けられた etic」を、emic な記述を目指すエスノサイエンスでは「emic の前提となる etic」をめぐって様々な問題を抱えているのが現状である。次に我々はそれを具体的な分析の局面から把えてみたい。

(3) 構造的リアリティと心理的リアリティ

エスノサイエンスの基本的な分析方法は意味論的分析 (semantic analysis) と呼ばれるが、それはある文化 (言語体系) に存在する「名称」を意味の次元に配列することによって、その「名称グループ」の意味空間

(semantic space)を描き出すものである。ここではタクソノミー (taxonomy) とパラダイム (paradigm) という 2 つの主な構成をとりあげ、その問題点を考察してみたい。

その場合、まず「名称」と「名称」の関係、及び「名称」とそれが指示する「対象物」との関係に分けて把えていくこととする。タクソノミーとは「名称」の相互関係を「包摂 inclusion」と「対立 contrast」という 2 つの軸に配列することによって構成されるものである。⁽³²⁾ 対象となる名称グループはその文化において互いに関係のある一連の単語でなければならない。そして U. Nida が言うように、「各項の間の関係が、ある共通の特徴とある互いに対立する特徴によって成り立っていること」⁽³³⁾ が必要である。もっとも最初から研究者が、共通の及び対立する特徴を認識できるわけではない。手順としては「AはBの一種か？」という質問及び否定的な答を予期した質問を通して、ある名称グループのタクソノミーを記述し確認していくのである。最終的に得られたタクソノミーには、名称間の縦の関係における「包摂」と同一レベルの横の関係における「対立」の特徴が見い出されなければならないのである。

名称グループを構成する各項目間の関係が明らかになった段階で、名称と対象物の関係が検討されねばならない。そこで用いられるのが「成分分析 componential analysis」と呼ばれる分析方法である。U. Nida によれば、その基本的手順は「1. データとなる『閉ざされた集合』の範囲を決定する。……2. 語をそれと対応する対象物という観点からできるだけ細かく定義する。……3. 意味上の様々な対立を規定する示差的特徴を見出す。……4. 示差的特徴によって各語を定義する。……5. 示差的特徴と分類された記号の全体の間関係について全体的な記述を行なう。……」⁽³⁴⁾ と規定されている。ここでいう示差的特徴 (distinctive features) とは、語によって指示される対象において「その語の適用を不可能にし、他の語の適用を要求するような特徴」⁽³⁵⁾ である。(例えば「年齢の上下」は日本語の

兄((弟))という語にとっては示差的特徴であるが、英語の brother という語では非示差的特徴である。) 結局、成分分析とは基本的には、1. ある名称グループを選択し、2. 名称とそれが指示する対象物との関係で、その示差的特徴を見出し、3. 示差的特徴をその語のもつ成分(components)と把えることによって、成分を基準に語を再配列する方法であるといえる。分析の結果得られる構造は、名称グループを構成する各語の意味特徴が多元的(multiple)で、しかも相互に交差する(intersect)という特徴をもち、一般にパラダイム(paradigm)と呼ばれる。

さて成分分析は非常に実証的かつ精密ではあるが、そこに問題がないわけではない。第1に、タクソノミーについても言えることであるが前述したように条件を備えたある限られた名称グループにしか適用できない点である。親族、植物、動物 etc. といった特定の名称領域に限定され、しかも領域間の関係の考察にまで到っておらず、その点である文化の全体的な記述は、現在の段階では不可能である。第2に、最少限の成分によって語を配列するため、語のもつ内包的(connotative)意味が無視される点である。同義語(synonym)、同音異義語(homonym)もしくは隠喩(metaphor)といった言語現象に直面した場合にしばしばその方法論的限界を露呈することになる。⁽³⁶⁾ 第3に、前述した「賦課される etic」(J. Berry)のレベルに関わる問題として、A. Wallace のいう「クラスの論理 the logic of classes」と「関係の論理 the logic of relations」の指摘に注目しなければならない。⁽³⁷⁾ 例えば、英語における Father という概念をとりあげてみると、成分パラダイムにおいては、図2に示されるように、「男性」、「直系」そして「より上の、厳密に言えば1世代上の世代」という3つの成分範疇が、交差する(intersect)1クラスとして示される。つまり成分パラダイムの基底にはこのような「クラスの論理」が見い出される。ところが、我々が日常このような思考をしていないことは明白である。日常的思考においては「オバとは何であるか」という定義よりも、「私にとってオバは誰であ

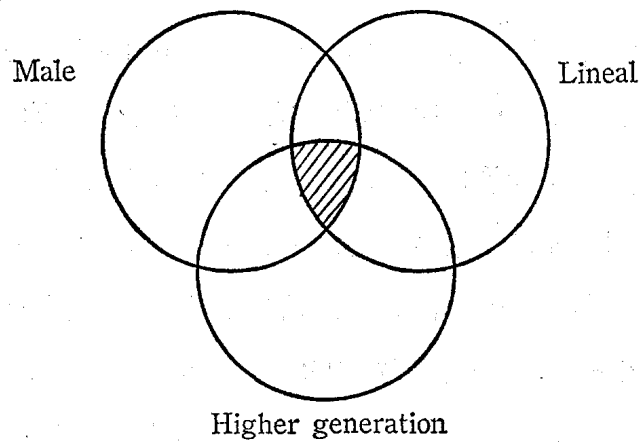


図 2 クラスの論理 (Wallace, 1970)

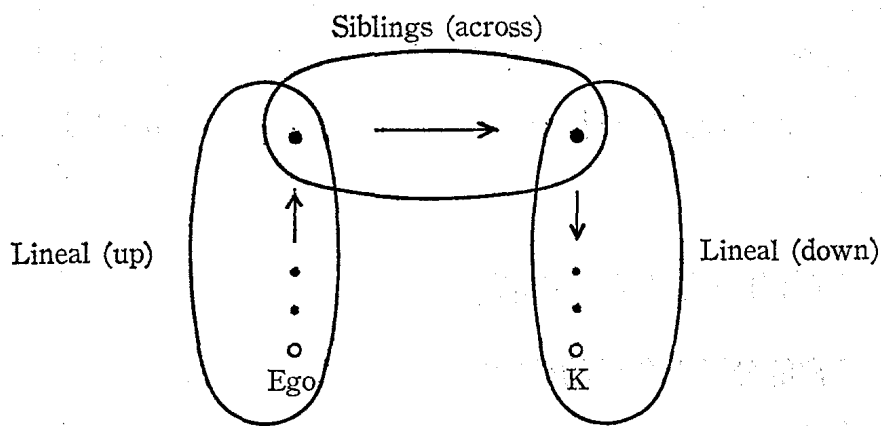


図 3 関係の論理 (Wallace, 1970)

り、イトコは誰にあたるか」が重要なのである。その場合、図3に示されるように、私(ego)はまず自分の親を考え(Lineal: up)、次に親の兄弟を考え(Siblings: across)、そしてその子供を考えて(Lineal: down)、イトコKにいきつくのである。この観点からみれば、成分パラダイムで説明される親族名称は、「子 child、親 parent、キョウダイ sibling」という3つの用語で、ほとんど同定できるのである。A. Wallace はこれを「関係の論理」と呼び、より日常的思考に近いことを指摘している。

だとすると、成分パラダイムをそのまま認知体系と見做すのではなく少なくとも理想型としては両者を区別し、各々にリアリティを認める立場に

導かれる。⁽³⁸⁾ A. Wallace と J. Atkins は、両者を各々「構造的リアリティ structural reality」, 「心理的リアリティ psychological reality」と呼びその関係について次のように述べている。「個人の心理的リアリティとは、彼が彼自身の観点から知覚し知っているような世界であり、即ち彼のもつ意味の世界である。ある文化の‘心理的にリアルな’記述とは、故にその文化を構成する成員の意味の世界が、観察者において近似的に再生されるような記述なのである。一方‘構造的リアリティ’とは、所与の社会や個人に適用される、民族誌家にとってリアルであるような意味の世界なのである。」⁽³⁹⁾ その点からみると、成分パラダイムは構造的にはリアルであっても必ずしも心理的にリアルな記述とは言えないのである。問題点の指摘としては興味深いが、では「ある文化の心理的にリアルな記述」とは一体何であり、どのような方法で行なわれるかという点では問題はまだ未解決なのである。

III. 象徴的分類とその問題

(1) 日常的分類と象徴的分類

以上に論じてきた諸点からも推察されるように、エスノサイエンスに代表される米国を中心とした「形式的分析 formal analysis」は、その方法に厳密であろうとする反面、現象のもつ象徴的側面が考察の視野から外されるという点で1つの弱点を持っていると断言してもいいかもしれない。R. Ellen が言うように、語や分析範疇への関心は、逆に多様な意味を含んだ現実を抽象化された分類システムに解消してしまう危険を孕んでいるのである。⁽⁴⁰⁾ 分類を対象とする点では同じでも、エスノサイエンスが専ら日常言語の範疇からそれを捉えるのに対し、英国を中心とする「象徴的分類」研究は、人間の身体や動作、社会的行為や出来事及びコミュニケーション、社会的時間や空間といった日常言語以外の範疇も含め、分類を社会的文脈において捉えようとする点で特徴的である。だが、そこでの関心は、実際

の (actual) 分類そのものよりも、むしろその「社会的付随物」に注がれてきたという側面も無視することはできない。ここではまず「象徴的分類 symbolic classification」を「日常的分類 everyday classification」との関係において把え、その問題点を探ることにしたい。

象徴 (symbol) とは、C. Geertz によれば、「ある 概含内容 (即ちその象徴の意味) の媒体となる物体、行為、出来事、性質もしくは関係⁽⁴¹⁾」であると定義されている。つまり、F. de Saussure の言う「所記 signifié: 意味されるもの、記号内容」を表わすところの「能記 significant: 意味するもの、記号表現」に当るわけだが、注意しなければならないのは、ここでいう記号表現と記号内容の関係そして記号 (表現) とその指示対象との関係における「恣意性 arbitrariness」、即ち両者の間に何ら本質的な関係はないという点である。⁽⁴²⁾ E. Leach はこの点を明確にし、象徴をより厳密に「恣意的連合 (arbitrary association) によって、あるメッセージを伝達する媒体」と位置づけている。⁽⁴³⁾ この点からみれば、象徴とは、例えばフクロウが学者を表わし、鳩が平和を表わすと言うように、本質的に固有のつながりのない何か別のものを表わす何かであると把えることができる。

さて一般に象徴的分類と呼ばれる 分類形態は、2 元論 dualism を始めとして様々な形態が多く文化において報告されている。⁽⁴⁴⁾ だがそのような文化が同時に日常生活に必要な実用的分類体系を有していることもまた事実である。ここで我々はこの 2 種の分類体系の相互関係に注目しなくてはならない。この点に関する第 1 の立場は、象徴的分類はあくまである特定の場や文脈においてのみみられるものであり、その点で実用的分類の方がはるかに重要であるとするものである。例えば、M. Bloch はバリ島民にみられる象徴的な非持続的 (non-durational) 時間観念の体系を再検討し、それが儀礼の文脈においてのみ現われる体系であり、農業や政治及び経済といった生活の大部分を占める実用的局面では、むしろ我々と同質の普遍的な持続的時間観念が用いられていると指摘している。⁽⁴⁵⁾ そして儀礼の象徴

的側面を重視する研究者が、その側面での認知体系の文化的相対性を強調し過ぎる余り、基底に存する普遍的な実用的局面を見過している点を批判する。彼によればそのような研究者は「それによって我々が世界を知るところの体系を、それによって世界を隠すところの体系と混同してきた」⁽⁴⁶⁾ことになるのである。彼の言う実用的な面での認知的普遍が証明可能かどうかは問題だが、確かに我々は日常生活のすべての面で象徴的であるということとはできない。だが儀礼の局面でみられる象徴的観念体系が「世界を隠す」ものかどうかは依然として残る問題である。第2の立場は象徴的分類体系に積極的意義を認めようとするもので、M. Bloch に対する M. Bourdillon の反論にみてとれる。彼は特に (1) 非持続的な時間観念は実用的状況においても用いられている、(2) 実用的状況における生起と普遍性が、観念の妥当性を証明する基準とはいえない、(3) 儀礼にみられる非持続的時間観念の体系は、世界を隠すのではなく、むしろ世界を顕わす (reveal) のを助ける、という点を中心に反論を展開している。⁽⁴⁷⁾ M. Bloch に対するマルクス主義的先有傾向への批判は置くとしても、ここで我々は象徴的分類体系が世界を隠すのか、あるいはそれを顕わすのかという2つの見解に直面することになる。これは単に研究者の立場にのみ帰せられる問題ではない。間接的な関わりも含めると、モノグラフのレベルでは、例えば日常的分類と象徴的なトーテム分類との関係において、その間につながりを認める積極論 (R. Bulmer) とつながりを認めない消極論 (P. Worsley) の見解の対立、⁽⁴⁸⁾ さらに歴史的な軸に敷衍すれば、J. Peacock の言う「分類的世界観 the classificatory world view」と「道具的世界観 the instrumental world view」の対立的相互関係にも関わっているのである。⁽⁴⁹⁾

認識論的角度からこの問題に接近した R. Needham は、実用的分類も象徴的分類も共に見出だされる関係であると捉えている。彼は、実用的分類は人間が社会生活を営む上で必要不可欠なものであること、またその分類の範疇装置に非常にしばしば象徴的側面が存在することも共に事実であ

るというのである。⁽⁵⁰⁾ とすると、何故分類のある側面は象徴的であるかという疑問が導出される。その範疇の社会的重要性 social importance を高めるために象徴が用いられるという一般的な答えに対して彼は否定的である。「……シンボリズムはシンボライズされるものの重要性を高めるが、……だからといって社会的重要性をもつ全ての個別範疇がシンボライズされるわけではない。」⁽⁵¹⁾ その点からみれば、象徴性は社会的重要性の尺度とはならないわけである。象徴についてと同様に、シンボリズム一般においてもかなり恣意的な側面が存在しており、社会的重要性のみで象徴的側面は説明できないのである。結局、導かれる結論は「分類は思考や社会的行為にとって本質的であるが、シンボリズムは分類にとって本質的ではない。」⁽⁵²⁾ ということであり、その点で分類の象徴的側面に特定の機能を帰するのは極めて困難であると言わざるを得ないのが現状であろう。

(3) アノマリー (Anomaly) とその属性

象徴的分類の研究は、一方で分類体系そのものの分析よりも、分類から派生する諸現象及び分類という行為に内在する意味の考察において多くの成果を挙げてきた。アノマリー、コミュニタス (communitas) そしてリミナリティ (liminality) といった一連の概念は、その成果の一環であると同時に、ある文化及び文化一般の分類に関わる諸現象を研究する場合にも有効な説明概念として役立ってきたのである。だが果してそれらの概念は etic に適用可能であるかどうかという問題をここでとり上げてみたい。

上述の諸概念は各々その名称こそ違いが、ある共通の知見を前提としている。それは、M. Douglas の次の言葉に最もよく示されている。

「無秩序が形式 (pattern) を破壊することは当然であるが、一面では形式の素材を提供する。一方秩序は制約を意味している。秩序を実現するためにはありとあらゆる素材から一定の選択がなされ、あらゆる可能な関係から一定の組み合わせが用いられるからである。従って無秩序とは無限定を意味し、その中にはいかなる形式も実現されていないけれども、無秩序

のもつ形式創出の潜在的能力は無⁽⁵³⁾限なのである。」

ここにおける秩序／無秩序の 関係は、社会的レベルにおいては、V. Turner のいう社会構造／コミュニティの動態的な関係に移行する。「コミュニティは、境界性 (liminality) において社会構造の裂け目を通して割り込み、周辺性 (marginality) において構造の先端部に入り、劣位性 (inferiority) において構造の下から押し入ってくる。それは、ほとんど到る所で、聖なるもの、ないし“神聖なるもの”とされている。おそらく、それが構造化され制度化された諸関係を支配する規範を超越し、あるいは解体させるからであり、またそれには未曾有の力の経験が伴なうからである⁽⁵⁴⁾う。」

秩序／無秩序、社会構造／コミュニティの関係はまた、E. Leach が社会的時間及び空間の境界の属性として挙げる、正常／異常、時間的限定性／無時間性、明確な範疇／不明確な範疇、中心／周縁、俗／聖という隠喩的等価と密接につながっている。⁽⁵⁵⁾ 対の右側に示される境界における一連の属性は、E. Leach によれば、言語範疇による一般的な識別作用に端を発している。図4において、円Pをある言葉の範疇とし、 $\sim P$ をPの「環境」とすると、これら2つの円の重複する部分がタブーとされるわけであり、それによって我々はPと $\sim P$ が違ったものであるという二者択一的論

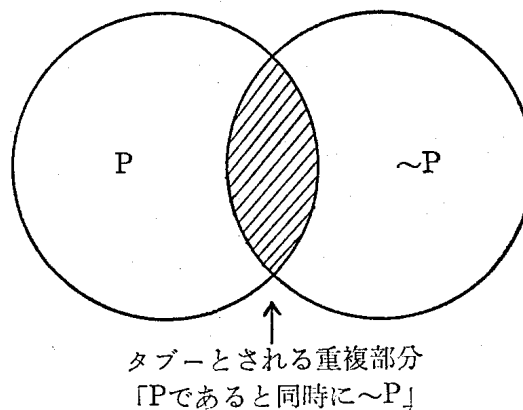


図4 曖昧さとタブーの関係 (E. リーチ, 1976)

理を満たすことができるというのである。⁽⁵⁶⁾ この論理を分類体系に適用すれば例外 (anomaly) とタブーとの関係が導出される。「タブーとは、範疇の明快な対立という点では例外的な範疇に適用される……、A、B 2つの言葉の範疇があるとして、Bは『Aでないもの』と定義され、その逆もまた真である時、ここにこの対立を仲介する第3の範疇Cが現われて、A、B双方の属性を共有すれば、その時Cはタブーということになる……」⁽⁵⁷⁾ としてCがタブーであるということは、即ち「聖性、価値、重要性、力、危険を有し、不可触で汚らしくて口に出せないもの」⁽⁵⁸⁾ であることを意味するのである。

このようなアノマリーとその境界的な属性についての論述は極めて興味深い内容を有しているが、その事が同時に比較文化的レベルでの一般性を有していることを意味しないという点に注意しなければならない。それはある現象の興味深い分析結果ではあるが、分析の前提となる一般理論として適用される場合には、前述した emic-etic の相互関係に照した慎重な手続きが必要とされるであろう。例えば、T. Beidelman は、カグル族のトリックスターの分析において、それを一般的に把えるのではなくて、その社会の思考様式や組織形態の中で意味を考察しなければならないと述べ、V. Turner や Babcock-Abraham の用いるコミュニタスの概念は、専ら研究者の側のパースペクティブによるもので真の問題を錯綜・歪曲させると指摘している。⁽⁵⁹⁾ 必ずしも全ての社会が同じやり方で、ディービアントで曖昧な無秩序的な性格を把握しているとは言えないのである。

問題は2つの点から把えることが可能である。第1点はアノマリーが見出だされるやり方に関わっている。M. Douglas や E. Leach によるアノマリーの規定の前提が、monothetic (単一特性共有的) な分類原理にあることは明白である。⁽⁶⁰⁾ monothetic とは、少なくとも1つの特性をそのメンバーが共有することによって定義されるクラスを意味している。例えば、陸生でも水生でもあるような動物は、monothetic な分類原理ではアノマリ

とされるのである。一方、動物学や生物学でかなり以前から用いられ、R. Needham によって人類学への適用が示唆された polythetic (多特性分有的) な分類原理では結果は変化してくる。polythetic とは、そのメンバーがある単一の特性を共有しないようなクラスに適用される用語であるが、例えば、(1) a b c, (2) a b d, (3) a c d, (4) b c d というような特性分布をもつクラスの場合である。この4つの対象は全てが共有するような特性はひとつも持たないが、“鎖状複合 chain-complex” (L. Vigotsky) あるいは“家族的類似性 family resemblances” (L. Wittgenstein) と呼べるような、要素間の重複によって成立しているクラスなのである。R. Needham は polythetic な原理の方が日常的思考に近いと指摘しているが、異文化における monothetic な見方のみによるアノマリーの選別は、その点で極めて危険である。R. Ellen が言うように「我々は存在しない所にアノマリーを創り出さないように注意しなければならない。」⁽⁶¹⁾のである。第2に、そこから当然推察されるように、聖性、力、危険 etc. というようなアノマリーの属性に関しても、最初からその普遍性、一般性を決めてかかるわけにはいかない。前述した、範疇間の境界が力や危険に満ち、タブーの対象とされ、そうされることによって分類を成り立たせているという命題が果して E. Leach が言うように一般理論たり得るかどうかは疑問である。その点に関して、R. Needham は、民族誌家によってアノマリーとして報告される生物はしばしばその文化的環境の正常な一部分であり、その文化の成員によってアノマリーと見做される場合でも、そうであることによってむしろ彼らの分類の一部の見做すべきだと述べているが、それはアノマリーであるということが危険に対する恐れや不安という感情的反応を常に起こすものではないという点をその根拠としている。⁽⁶²⁾少なくとも我々は前述したアノマリーの規定及び一般的な属性を、第1段階の etic な分析概念として、慎重な配慮なしに異文化に適用することは控えるべきであろう。

IV. 結

以上、我々は現代人類学における「分類」研究の現状について、そこに内在する主な問題点を中心に論じてきた。エスノサイエンス及び象徴的分類は、各々米国と英国を中心とする、現在の時点では密接な相互交流には到っていない、ある意味で相互に独立した学問領域である。しかしながら日常的あるいは象徴的を問わず、両領域の「分類」現象への注目の背後には、Lévi-Strauss の構造論の直接あるいは間接的影響のもとでの、行動そのものから觀念及び思考もしくは行動に表象される意味体系への関心の移行、文化の内側からの理解の重視、そして言語及び言語学への接近といった共通の理念枠組が存在し、その点で人類学理論の新たな展開の一翼を担ってきたといえる。その意味で、前述した諸問題は各領域の問題であると同時に、分類研究全体のレベルでは両者に共有されるべき問題であると思われる。

註

- (1) E. Ardener は、新人類学の新しい語には、従来のテキストやモノグラフや解釈を無用化してしまう何かが社会人類学に既に起こったという意味が含まれていると述べ、批判的角度から詳細なコメントを行なっている。Ardener, E., 'The New Anthropology and Its Critics' *Man*, (N.S.) 6, 1971, pp. 449-67 参照。

また、S. Tyler の「The old and the new」という2分的説明は、この視点の変更及びその対照性を積極的に呈示している。Tyler, S. A., 'Introduction' in S. A. Tyler (ed.), *Cognitive Anthropology*, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1969, pp. 1-5. 参照。

- (2) Leach, E., *Culture and Communication*, Cambridge Univ. Press, 1976 (a), p. 5
- (3) Frake, C. O., 'The Ethnographic Study of Cognitive Systems', in S. A. Tyler (ed.), *op. cit.*, p. 38
- (4) E. ゲルナー／松井清・久保田芳廣訳「概念と社会」(D. エメット & A. マッ

- キンタイア編／松井・久保田訳『社会学理論と哲学的分析』, 弘文堂, 1976, 所収) p. 182
- (5) レヴィ＝ストロース／大橋保夫訳, 『野生の思考』, みすず書房, 1976 p. 323
- (6) Malinowski, B., *Argonauts of the Western Pacific*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1953, p. 25
- (7) Geertz, C., 'From the Native's points of View: On the Nature of Anthropological Understanding', in Dolgin, J., Kemnitzer, D., & Schneider, D., (eds.), *Symbolic Anthropology*, Columbia Univ. Press, 1977, pp. 480-91 参照.
- (8) Leach, E., 'Social Anthropology: A Natural Science of Society?', Oxford Univ. Press, 1976 (b)
- (9) Kaplan, D., & Manners, R. A., *Culture Theory, Foundations of Modern Anthropology Series*, Prentice-Hall, Inc., 1972, pp. 127-61 参照.
- (10) レヴィ＝ストロース／川田順造他訳『構造人類学』, みすず書房, 1972, pp. 37-61 参照.
- (11) E. リーチ／吉田禎吾訳「レヴィ＝ストロース」, 新潮社, 1971, p. 34
- (12) 大貫恵美子, 「文化と分類」, (『思想』No. 676, 岩波書店, 1980, 所収) pp. 36-9, なお図1は p. 39 から引用したものである.
- (13) 同上, p. 37
- (14) Ellen, R., 'Introductory Essay' in Ellen, R., & Reason, D. (eds.), *Classifications in their Social Context*, London: Academic Press Inc., 1979, p. 4
- (15) Hunter, D., & Whitten, P., (eds.), *Encyclopedia of Anthropology*, Harper & Row, Publishers, Inc., 1976, p. 76
- (16) Carroll, J. B., (ed.), *Language, Thought and Reality—Selected Writings of B. L. Whorf*, Boston: Technology Press of Massachusetts Institute of Technology, 1956, 参照.
- (17) Tyler, S. A., op. cit., p. 6
- (18) Sturtevant, W. C., 'Studies in Ethnoscience', *American Anthropologist*, Special Publication: *Transcultural Studies in Cognition*, vol. 66, 1964, pp. 99-131
- (19) 有馬道子「サピア・ウォーフの仮説」(『言語』, vol. 8-2, 大修館書店, 1979, 所収), pp. 20-27
- (20) Hoiijer, H., 'The Relation of Language to Culture', in A. Kroeber

- (ed.), *Anthropology Today*, Univ. of Chicago Press, 1953, p. 570
- (21) Burling, R., 'Cognition and Componential Analysis: God's Truth or Hocus-Pocus?', in S. A. Tyler (ed.), *op. cit.*, pp. 419-28
 - (22) Frake, C. O., *op. cit.*, p. 30
 - (23) Brown, R., & Lenneberg, E. H., 'A Study in Language and Cognition', *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 1954, pp. 454-62 参照.
 - (24) Barnouw, V., *Culture and Personality*, 2nd edition, The Dorsey Press, 1973, p. 85
 - (25) Kaplan, D., & Manners, R. A., *op. cit.*, pp. 143-88 参照.
 - (26) Tyler, S. A., *op. cit.*, p. 3
 - (27) Pike, K. L., 'Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior', Part 1. Glendale, Calif.: Summer Institute of Linguistics, 1954, pp. 8-28
 - (28) French, D., 'The Relationship of Anthropology to Studies in Perception and Cognition', in S. Koch (ed.), *Psychology: A Study of a Science*, Vol. VI, New York: McGraw-Hill, 1963, pp. 398-9
 - (29) Berry, J. W., & Dasen, P. R., (eds.), *Culture and Cognition*, Methuen & Co. Ltd., 1974, pp. 12-20, なお表は p. 16 から引用したものである.
 - (30) 唐須教光「言語学と人類学における示差的特徴の概念について」(『民族学研究』39巻3号, 1974, 所収) pp. 254-9
 - (31) French, D., *op. cit.*, p. 398
 - (32) Tyler, S. A., *op. cit.*, pp. 6-13
 - (33) U. ナイダ/池上嘉彦訳「成分分析」(サピア・ウォーフ他著/池上訳『文化人類学と言語学』, 弘文堂, 1970, 所収) p. 111
 - (34) 同上, p. 112
 - (35) 池上嘉彦「意味の世界」(滝田文彦編『言語・人間・文化』, 日本放送出版協会, 1975, 所収) pp. 134-7
 - (36) Goodenough, W. H., 'Componential Analysis and the Study of Meaning', *Language* 32, 1956, pp. 195-216 参照.
 - (37) Wallace, A. F. C., *Culture and Personality*, 2nd ed., Random House, 1970, pp. 84-92, なお図2及び図3は p. 91 から引用したものである.
 - (38) Wallace, A. F. C. & Atkins, J., 'The Meaning of Kinship Terms', in S. A. Tyler (ed.), *op. cit.*, pp. 345-69. Wallace, A. F. C., 'The Problems of the Psychological Validity of Componential Analyses', in S. A. Tyler

- (ed.), op. cit., pp. 396-418
- (39) Wallace, A. F. C. & Atkins, J., op. cit., pp. 363-4
- (40) Ellen, R., op. cit., pp. 1-7
- (41) Geertz, C., 'Religion as a Cultural System', in M. Banton (ed.), *Anthropological Approaches to the Study of Religion*, Tavistock Publications, 1966, p. 5
- (42) F. ソシュール／小林英夫訳『一般言語学講義』, 岩波書店, 1972 参照.
- (43) Leach, E., op. cit., 1976 (a), p. 5
- (44) Needham, R., *Symbolic Classification*, Goodyear Publishing Company, 1979, pp. 6-15 参照.
- (45) Bloch, M., 'The Past and the Present in the Present', *Man*, (N.S.) 12, 1977, p. 278-92
- (46) *ibid.*, p. 290
- (47) Bourdillon, M. F. C., 'Knowing the World or Hiding it: A Response to Maurice Bloch', *Man*, (N.S.) 13, 1978, pp. 591-9
- (48) Worsley, P. M., 'Groote Eylandt Totemism and Le Totemisme aujourd'hui', in E. Leach (ed.), *The Structural Study of Myth and Totemism*, Tavistock Publications, 1967 参照.
- Bulmer, R., 'Mistical and Mundane in Kalam Classification of Birds', in R. Ellen (ed.), op. cit., pp. 57-79 参照.
- (49) Peacock, J. L., 'Symbolic Reversal and Social History: Transvestites and Clowns of Java', in B. A. Babcock (ed.), *The Reversible World*, Cornell Univ. Press, 1978, pp. 209-24
- (50) Needham, R., op. cit., pp. 17-9
- (51) *ibid.*, p. 18
- (52) *ibid.*, p. 17
- (53) M. ダグラス／塚本利明訳『汚穢と禁忌』, 思潮社, 1972, p. 184
- (54) V. ターナー／富倉光雄訳『儀礼の過程』, 思索社, 1976, p. 175
- (55) Leach, E., op. cit., 1976 (a), pp. 33-6
- (56) E. リーチ／諏訪部仁訳「言語の人類学的側面」(『現代思想』, vol. 4-3, 青土社, 1976, 所収) pp. 68-77, なお図 4 は p. 75 から引用したものである.
- (57) 同上, p. 77
- (58) 同上, p. 76
- (59) Beidilman, T. O., 'The moral imagination of the Kaguru: some tho-

ughts on the tricksters, translation and comparative analysis', American Ethnologist, 1980, vol. 7, pp. 34-9

- (60) Needham, R., 'Polythetic Classification: Convergence and Consequences', Man (N.S.) 10, 1975, pp. 349-69
- (61) Ellen, R., op. cit., p. 14
- (62) Needham, R., op. cit., 1979, pp. 43-7